



ゆき



吉田 祥大

ゆき

こんこんと降り頻る夜半。雪の精、“ゆき”は風に乗って街を目指していた。気まぐれに吹く横風に乗って、ゆきは天高く舞い上がる。そこから見下ろす世界は、白一色。

ゆきはその景色ににんまりとした。積雪が全てを多い隠す季節。それは美しく、雪の精“ゆき”が優越感に浸れる時期でもあった。

街に近づくにつれ、風は徐々に強まってゆく。仕舞には、暴風と言ってもいい程の強い風が変わった。それが、ゆきの胸に少し不安をもたらした。

そして訪れた、街の光景。

それは銀世界などという生易しいものではなかった。ぼた雪は横殴りの突風にさらわれ、家屋や樹木に叩きつけられ、その骸をこびり付かせる。地面はすでに何十センチもの積雪があった。

轟々と唸りを上げる暴風は、表面の粉雪を巻き上げ、中空で渦を巻く。それは、雪嵐と言うべき凄まじさで、グレー色の空に踊り狂った。

その、暴力的なくらい雄々しい光景に、ゆきは迂闊にも見惚れ、荒れた世界に心焦がしてしまった。ゆきは吹き抜ける風に乗れ、外界へ身を飛ばす。

瞬く間に暴風にさらわれ、粉雪とともに宙を舞った。

ぐるぐると目まぐるしく視界が展開してゆく中、ゆきは嵐に乗ってしまった事を後悔した。だが、一生に一度くらい、こういう体験を試してみるのも悪くないと思った。

雪嵐は猛り狂っているというのに、道路には車がひしめき合っていた。ヘッドライトにこびり付いた雪も落とさず、臃な光線で前を照らして、人間達はどこへ行こうというのだろう。冬になる度、いつも疑問に思う。しかし、それ以上はゆきの興味の無い所なので考えるのを止めた。

暴風はゆきの身体をしたたかに打ちつけ痛めつける。いい加減うんざりしてきた所、眼前にビルが聳えていた。

ゆきは慌てて下からの突風に乗って、垂直に上昇した。

ビルの一室では、暖色の明かりの中、鍋を突付いている家族の姿が見えた。幸せそうな顔で食している人達。熱々の汁を子供がこぼし、母であろう大人の女性が笑いながら叱責しているのを見て、ゆきは思わず苦笑してしまう。

そこへ、不意に下からの突風が、ゆきを更に上階へと押し上げる。

その窓からは、丁度帰宅した所なのか、頭上や肩に雪を積もらせているスーツ姿の男性がいた。玄関で頭や肩を叩いて雪を落とすと、電気ストーブで暖を取った。そして、手にしていたビニール袋から缶ビールを取り出すと、すぐその場であおった。

二、三度喉を鳴らし、缶から口を離すと、大きく息を吐く。帰宅したばかりの時は強ばった顔をしていたが、今は安堵の表情に変わっていた。

ゆきに彼の心理は分からない。しかし、人間もあんなに穏やかな顔をするのだと思うと、少し嬉しくなった。

再び下から突風が吹く。ゆきはさらに上空へと飛ばされた。

その窓からは、若い男女が見えた。テーブルにはケーキが乗っており、それを挟んでにこやかに談笑していた。

これはゆきも知っている。二人は恋人同士だと。

二人は窓際へ寄って、ぼた雪の乱舞を眺めた。驚嘆の顔は恐れではなく、好奇の表情だった。

ところでゆきの姿は、人間にはひとひらの雪に見えている。ゆきはずっと二人を楽しませてやろうと、周囲の風に乗って舞い踊った。

やがて、また下からの突風がゆきを押し上げた。遂に、ビルよりも上空へと舞い上がった。

陰鬱なグレーが広がる空だったが、ゆきの心は晴れ晴れとしていた。周囲を舞っている雪は、明日になれば今の倍程の積雪となるだろう。人間はそれを見て驚愕するだろう。

だが、“雪月花”という言葉もある通り、人間はこの酷寒の景色も楽しむ事の出来る生き物。その事実がゆきを高揚させた。

感極まったゆきは、自らぐんぐん上昇し、やがて雪雲をも突き抜けた。

そこは、闇と静寂と星空があるだけの、つまらない世界だった。